小説田中英光／愛と革命の墓標／北村鱒夫／三

小説田中英光／愛と革命の墓標／北村鱒夫／三一書房

北村鱒夫
きたむらますお

1925年　京都府に生まれる
中学卒業後，郵便局員・鋳造工・船員・雑誌記者・商業デザイナーなどの職を経る中で「新日本文学」「群像」などに創作を発表

著　書　『花やかな虚像』『死者との契約』『夜の逆流』いずれも（青樹社）

現住所　東京都練馬区上石神井二丁目
石神井団地6号一3

小説田中英光　　©著者　北村鱒夫

1965年2月25日／第一版発行／発行者／竹村一／発行所／株式会社三一書房（東京都千代田区神田駿河台2の9）／印刷所／同興印刷株式会社／製本所／橋本製本所　定価 460円

小説田中英光愛と革命の墓標／目次

序　章　五
第一章　三四
第二章　六七
第三章　九七
第四章　一二五
終　章　一五六
田中英光の文学　一七二
あとがき　一九五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

小説田中英光——愛と革命の墓標

序章

一九四九年十一月三日、田中英光は三鷹市下連雀にある黄檗宗の名刹禅林寺の境内で自殺をした。太宰治の墓前である。

日本共産党を脱党し、妻子五人を敝履のように捨てて家を飛び出し、娼婦と同棲生活を持ったものの、その愛人からも嫌われるようになり、知友たちにさえうとんじられた英光は、その孤独な漂泊のはてをそこに求めるしかなかったのだ。

生前、終始変わらず彼の人柄と才能を愛してくれたひとの墓標の前だけが、生きるのに疲れは

て、六尺の身体を横たえる塒すら持たない彼にとって、唯一にして最後の宿と考えられたのかもしれない。

思えば、行路病者の末路さながらの悲惨にして愚かしい終焉である。

前年の梅雨期に、太宰治が愛人山崎富栄とともに玉川上水に没したとき、英光は兄事していたひとの死を悲しんで一時期狂乱したあと、漸く落ちつきを取り戻してから、感慨深げにこう語ったことがある。

「太宰さんはパピナール中毒と肺病に勝てなかったんだ。生活していく力に自信を失っていたから、あの女の死の誘いに抗しきれなかったんだよ。もともと、太宰さんには醜悪に堪えきれる力がやや弱かった。それにしても、あの薹の立った文学少女が変な気を起こさなかったら、太宰さんはまだまだ活躍したかもしれない。情死だの心中だのと騒がれているけど、太宰さんはきっとあの女に殺されたのに決まっている。麻薬で正体を失っているところを、人喰い川に引きずり込まれたのに違いない」

そうしみじみと述懐しながら、ふと硬い光を眼に宿して私を見た英光が、それから僅か一年半たらずののちに、行き倒れ同様にして三十七年（満三十六歳十カ月）の生涯を終わったとは、今でも私は夢魔にたぶらかされているような気がしてならない。

勿論、そのとき、すでに疎開先の伊豆三津浜に妻と幼い子どもたちを置き去りにし、新宿の花

園町にあった山崎敬子の家に転がり込み、アドルムとカルモチンを手放せなくなっていた英光ではあった。世間の眼からは不倫頽廃の生活とも見え、結果からいえば、彼はもう破局の坂を滑り落ちはじめていたといえるかもしれない。

だが、英光はこの新しい生活のなかで、漸く心情の平衡を保ちながら、次なる飛翔の計画を秘かに抱きあたためていたように思えた。少なくとも、私の眼にはそう映じた。

とはいえ、英光の性格にのちの悲劇を思わせる兆しが全くなかったわけではない。たとえば、次のように自負にみちた言葉を語っているときにも、彼の表情は別の心を露わにのぞかせていたのである。

「ぼくを純情で気が弱いというのが定評のようだし、ぼくもそれを認めるけれど、絶望を売り物にしている戦後派の新人ほど弱くないつもりだ。文壇の連中はぼくの女々しさ軽率さなど表面の現象だけを捉えて悪口をいうけれど、椎名麟三や野間宏の深刻そうで勿体ぶった文体に接すると、忽ち無条件に参ってしまうんだ。要するに、日本の文壇全体がまだ文学青年の青臭さを抜けていないということさ。左翼の作家だって似たりよったりでね、狭い文壇という領域でものを考えたり、文章を公表しているだけだ。大衆のことなど、てんで念頭にありゃしない。仮にも民主主義文学を口にし、人民のための文学を旗印しにするのなら、もっと大衆に理解できる文章、面白く読める小説を書くべきだよ。それには人民大衆のなかに根強く巣喰っている封建的なものに

も、一度は密着してみなければならない。ぼくの甘ったれで自堕落な小説が、すべて心にもない虚構だとはいわぬけれど、読者へのサービスのために極端にデフォルメしている場合もあるんだ。それに、なにしろ、ぼくは発表舞台に恵まれないし、注文を貰う雑誌の性格からくる制約もあって、なかなか思うように仕事を進められない点もあるけれど、いつか真のコミュニストの文学を成立させたいという夢は捨てていない」

昂然とした風に抱負を聞かせていながら、英光の眼は焦慮に似たものに揺れ、厚い唇の端に白く唾液をためて震わせ、浅黒い童顔を俄かに曇らせているのである。自分の文学が正当に評価されていない不満と、生活のために娯楽読物の類いを量産させられている自卑のいろが暗くにじんでいるのだ。容易に言葉をかける気になれぬほど、その巨体には鬼気めいた怨念すら匂っていた。

確かに英光はある意味で不運な作家のひとりといえるかもしれない。太宰治の世話で『文学界』に中篇「オリンポスの果実」を発表し、香気高い青春小説と讃えられて、菊池寛から池谷信三郎賞を与えられたときでさえ、彼は必ずしも幸運でなかったのである。

というのは、この一九四〇年は三年前から始まった中国との戦いが膠着状態にあり、戦争に飽きはじめた国民を鼓舞するために大政翼賛会が結成される一方、立ち場を決めかねた職業作家たちの空隙を縫って、国策に沿った素人文学が花やかに持てはやされている時代でもあった。

そして、英光が一九三二年夏、ロスアンゼルスで開催されたオリンピックにクルー選手として

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

参加した体験をもとに描いたこの処女作は、童話めいた恋物語という内容のせいもあって、素人作家という印象を深く与えてしまったのである。

「フランスのモンテルランだって、オリンピックの選手だったんだ。スポーツマンだから素人作家だと決めこんでしまう日本の作家根性はやりきれないな。しかし、太宰さんだけはぼくを肩書き抜きの作家として遇してくれたんだ。だから、ぼくは感謝の心をこめて、太宰さんを先生と呼んでいる」

これも生前の英光が口癖にしたひとつであったが、素材的な興味に流れるのを極端に排斥し、貧しい私生活の心境をつづるのを至高とする観念が底流としてあった当時の文壇において、英光はオリンピックを描き終われば、あとのつづかぬ才能に見えたのかもしれない。

「オリンポスの果実」で花々しく登場しながら、その後の英光の文学的航路は、必ずしも順風満帆というわけにはいかなかったようだ。それでも、彼は横浜ゴムに社員として勤務するかたわら、戦時中に「端艇漕手」「我が西遊記」「われは海の子」「雲白く草青し」などを上梓している。

ところで、英光が池谷賞を受けた同じ年の秋に、織田作之助は「夫婦善哉」を発表し、改造社の第一回文芸推薦作品に選ばれて、作家として出発している。その受賞の感想を求められて「将棋でいえば、端の歩をついたようなものだ」と揚言し、文壇の先輩たちの顰蹙を買った彼は、英光が素人めいた初々しさを云々されたのに反して、悪達者な表現力を危惧されたらしい。

だが、織田は世評なぞは気にならぬように、早速勤めていた日本工業新聞社をやめ、『夕刊大阪新聞』に野田丈六という筆名で時代小説を連載、翌年早々には長篇「二十歳」を刊行、つづいて「青春の逆説」「五代友厚」「月照」「西鶴新論」「漂流」「わが町」「大阪の指導者」などを矢継早に上梓して、旺盛な筆力をしめし、戦後文壇の寵児になる素地を築いていた。

田中英光が一九一三年一月に東京の赤坂で生まれ、織田作之助が同じ年の十月に大阪の天王寺で生を享けているのも奇縁である。そして、被虐意識の強い、英光が自負にみちた織田をライバル視したことは想像に難くない。

しかも、戦後文壇における織田作之助の活躍は、誠にめざましいものがあった。四六年のはじめに「六白金星」「アド・バルーン」「世相」「競馬」「夫婦善哉後日」などをたてつづけに一流誌に発表、忽ち流行作家のひとりに数えられ、『大阪日日新聞』や『京都日日新聞』に連載小説を掲載し、八月からは『読売新聞』に「土曜夫人」を書きはじめるという勢いである。そして、その作品の舞台が東京に移るにつれて、愛人輪島昭子とともに上京し、銀座裏の旅館でジャーナリストに囲まれながら執筆をつづけたという話は、今は伝説のひとつと化しさっている。しかも、その師走には大量の喀血をして倒れ、翌年松の飾りもとれぬうちに夭死した哀れさは、いっそう彼の生涯に夢幻的な光茫を添えているようだ。

織田が一途に文学に殉じていったのに反して、田中英光が職場を放棄してまで、作家生活に入

り切れなかったのは、単に文壇から冷遇されていたためばかりではない。英光には家庭があった。池谷賞を受けたとき、彼はすでに二歳の男の子の父親であり、翌年の二月には二番目の子どもが生まれることになっていた。

しかも、人並み以上に頑丈な身体を持った英光は、いつ戦場に駆り出されるか知れぬ不安がある。会社に籍さえ置いていれば、留守宅に給料が届けられ、家族の生活は一応安泰なのであった。仮に作家生活に踏み切ったあとで一片の赤紙を受けたら、もともと親の反対を押し切ってした結婚でもあり、残された妻子を路頭に迷わすことにもなりかねない。英光は織田に子どもがなく、しかも病弱のために徴兵の圏外にあるのを羨望しながら、勤務の余暇をぬすんで創作をつづけるしかなかった。

しかし、間なく戦争が終わりをつげ、英光は自らの意志でなく職場を去らなくてはならなかった。当時の多くの企業が生産サボタージュによる立ちなおりを計って、大量の人間を馘首して街頭にはんらんさせていたが、彼もまた戦後の被災者のひとりとして、横浜から家族の疎開している三津浜に戻っていかねばならなかったのである。

彼はこのことを前もって覚悟していたものとみえ、敗戦の五日後には青森の実家に避難していた太宰治をはるばると訪ね、職を離れたのちの生活について相談したりしている。だが、このとき、太宰は英光を満足させるような返事を与えられなかったらしく、九月二十三日付の手紙で次

のように慰めている。

拝復　先日は、私こそ大へん失礼いたしました。わざわざおたづね下さつたのに、あの混雑最中で、それに居候の身の上、お察し下されたく、先輩も胸中悲痛のものがあつたデス、御寛恕下さい。他日必ず東京で飲み直しませう。

会社のはうが、あぶない由、まああせらずに休養し、さうして読書と執筆をおつづけ下さい。文運大いに起つてゐます。

四、五日前、小山の加納君が金木へあらはれました。彼は兵隊に行ってゐたのださうです。たいへん丈夫になつて、九月に除隊になつて帰り、文運大いに起るの兆を望見して、近日旗挙げ準備に上京するさうです。出版会内の小山書店にレンラクしたら逢へるかも知れません。今日まで私のところへ原稿ほしいと言つて来てゐるものの中で主なるところは、

（新興会社では）新紀元社（中野正人）神田区西神田二ノ二十一、経国社（菱山雷章）京橋区銀座西五丁目五、鎌倉文庫創立事務所　麹町区丸ノ内丸ビル六階六九三号

いづれも仲々の意気込みです。何かおついでの時でも、立寄つてみるのも一興と思ひ、右記した次第です。とにかくいゝ小説を書いて下さい。生活費くらゐはかせげると思ひます。

英光は太宰の言葉に勇気づけられて上京し、教えられた出版社を歴訪して、先ず鎌倉文庫から「オリンポスの果実」を再版することを承諾して貰い、さらに小山書店の加納正吉も訪ねてみた。同書店が戦時中に企画した新編風土記シリーズに、太宰の推薦を得て英光は「土佐」を執筆し、未刊のままになっていたのだ。だが、この方の話は巧くまとまらなかったらしい。しかし、間もなく生活社から彼の戦後初の書きおろし「桜田門外」が刊行された。尤も、これは当時の逼迫した世相を物語るようなパンフレット形式のものである。

拝啓　けふは「桜田門外」を御恵送下さつて、ありがたく存じました。ゆつくり拝読します。だいぶお仕事に出精してゐるやうで、微笑の形だ。たくさん書くよりも、いいのを一つ書いたら、ワッといふ人気が出て、注文殺到し、「書けませぬ」など断つたり、そんな具合になるものだが、あまり泡を食つて、あちこちに持ち込まぬはうがいいかも知れない。

これも十一月十日付の太宰治の手紙の一節で、相変わらず愛弟に寄せるような慈しみにあふれている。しかし、英光にしてみれば、四三年に生まれた長女と義母を加えた五人の家族を養うために、血相を変えて幾篇もの作品を仕立て上げ、方々の出版社に持ち込まざるを得なかった。極度に物資が窮乏して、日を追って物価が上昇し、新聞の見出しに「死の行進がはじまった」と書

かれていた時代である。家を焼かれ、職を失ったひとびとが群れをなして流浪し、毎日のように餓死者が続出している凄惨な季節でもあった。

だが、太宰の前の手紙にあったように、多くの企業が意識的な沈滞をつづけているなかで、文運だけは異様なほど活況を呈しはじめていた。その年の十月はじめに綜合雑誌『新生』が新聞を無造作に折り畳んだような形で書店に姿を見せたのを皮きりに、『新潮』『文芸春秋』『文芸』が復刊され、新たに『民主評論』『人民評論』が創刊号を出し、さらに四六年一月号には『中央公論』『改造』『日本評論』『世界』『潮流』『展望』『近代文学』などの諸誌が勢揃いするという盛観ぶりである。

六五年の今日では殆ど信じられないことだが、四六年から英光の死んだ四九年のあいだに、次に列記するようなおびただしい数の文芸誌が店頭にはんらんしたのである。平凡な形容だが文字通り疾風怒濤と呼ぶべき時節であった。

風雪・個性・表現・新小説・思潮・文芸時代・新文学・文壇・諷刺文学・新文芸・次元・芸術・文明・進路・花・文芸大学・不同調・素直・丹頂・風報・玄想・復活・文学季刊・九州文学・知識人・未来・序曲・東北文学・早稲田文学・若草・三田文学・文芸往来・綜合文化・日本小説・明日・改造文芸・文学会議・日本文庫・小説界・肉体・人間・文芸首都・文学者・文学行動・文芸公論・人間美学・高原・文体・作品・世界春秋・新日本文学・文学界・群像

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.